

万葉集における類歌と複合動詞形成―動詞「過ぐ」を中心に―

百留康晴

はじめに

日本語には「持ち上げる」「運び出す」など複数の動詞から成る複合動詞が数多く見られる。同様のものは『万葉集』など上代文献にも存在するが、その動詞間の結合はそれほど緊密ではなかったと考えられている（金田一一九五三・青木博史二〇一三・佐佐木二〇一八・拙論二〇一五）。しかしそうであったとしても中古・中世にも同様の表現が数多く見られ、それ以降も引き続き使用され続けていることを考えればこれらが今日の複合動詞につながっていることに疑いの余地はない。

本論では『万葉集』における動詞「過ぐ」が単独で使用される場合の意味用法および他の動詞に接続する

場合の意味用法を明らかにし、『万葉集』における類歌という新しい視点から複数の動詞を接続する表現の固定化およびカテゴリーとしての成立との関係性を論じる。

一 『万葉集』の「過ぐ」に関する意味記述

『万葉集』における「過ぐ」について青木・橋本（二〇〇一）、多田（二〇一四）に詳細な記述がある。事前に両者の記述を整理し、以下に示す。

青木・橋本（二〇〇一）「すぐ（過）」の項（北野達執筆）
・万葉集に約一六〇例存在する。

・約六〇例はある特定の場所を通過することに用いら

れている。

- ・「過ぐる」所は、作者が特別に関心を寄せる、あるいは寄せなければならぬ所であった。
- ・時の経過を表現する歌は約七〇例ある。そのうち萩・桜・黄葉（もみち）などが「散り過ぐ」ことによつて季節の変化を感じとる趣の歌が二七例、「時」「春」「秋」「冬」などが「過ぐ」ことで同様の趣を表現した歌が一二例ある。
- ・死者に対しても「過ぐ」を用いた。死ぬことを「過ぐ」と表現した例は、一七例みえる。
- ・恋を「過ぐ」と表現した。こうした表現は万葉集に一二例あり、死を「過ぐ」と表現したことが同様に、消えてなくなることが「過ぐ」と表現された。

多田（二〇一四）「すぐ」「過ぐ」の項（大浦誠士執筆）

- ・こちら側の意志にかかわりなく、状況や事態がある定点を越えてどんどんと進行してしまうことが原義である。
- ・空間的な意味合い、時間的な意味合い、状況的な意味合いなど、用法によって様々な意味を表すのが特徴である。
- ・スグ（過ぐ）が原義として持つ進行の情調が明確に読み取れるのは、『古事記』『日本書紀』などの歌謡にしばしば見られる、過ぎて行く地名を列挙する「道行き」の詞章である。

いを明らかにしたい。

二 『万葉集』における「過ぐ」の単独用法

『万葉集』における動詞「過ぐ」は単独で、また他の動詞に接続して、用いられる。青木・橋本（二〇〇一）、多田（二〇一四）から窺える「過ぐ」の用法を《通過》《経過》《消滅》とし、本節ではまず単独で使用される「過ぐ」をもとに意味拡張の方向性および背景を考察する。

用例収集は国立国語研究所（2018）『日本語歴史コーパス』<https://chunagon.nijia.ac.jp/>（2018年10月1日確認）を用いて行った。そしてその底本である小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集 万葉集1〜4』小学館を資料とし、また用例の解釈に当たっては伊藤博（二〇〇五）『万葉集注釈』集英社なども参照した。なお左注にある「過ぐ」、ク語法により体言化した「過ぎまく」「過ぐらく」は考察対象外とした。

収集した「過ぐ」を単独で使用されたもの、他の動詞に前接・後接して使用されたものに分け、その用例数および意味別内訳を表一に示す。なお他の動詞に後接する例には「行きも過ぎぬる」「散りか過ぎなむ」など係助詞が介入したもの、「鳴き過ぎ渡る」「咲き散り過ぐ」など三語から成るものも含む。

・『万葉集』で最も多いのは、空間的な意味合いにおいて、特定の場所を通過する意味である。

- ・スグの持つ留めようのない進行の情調がよく現れるのは、時間や季節の推移を表すスグである。
- ・季節の景物である三笠（御笠）の山の黄葉が盛りを過ぎ、時雨にあって散りゆくことをスグと表現するのも、同様にスグの持つ留めようのない進行の情調による。
- ・スグが「思ひ過ぐ」のような形で、恋しい思いが消えてしまうことを意味するのも同様に考えることができる。

・人の死をスグと表現するのも、人がこちら側の世界から向う側の世界へと旅立つことを人の力では留めることの出来ない事態の進行と捉えたためである。

これらの記述から『万葉集』における「過ぐ」に空間の移動・時間の推移・対象の消滅を表す用法が存在したことが分る。これら三つの用法は一つの用法から徐々に拡張したと考えられるが、であるとすればどのようなことを接点としてこのような意味の拡張が生じたのか、単独で使用される場合と他の動詞に接続して使用される場合とで意味的な違いがあるのか等明らかでないことがある。本論では単独で使用される場合、他の動詞に接続して使用される場合、を分け、意味拡張の道筋および単独用法・接続用法両者の意味的な違

表一 上代における「過ぐ」の用例数

	後接	前接	単独	
通過	12	8	35	
経過	2	4	30	
消滅	26	2	29	
合計	40	14	94	

表一から単独で使用される場合、動詞に前接する場合は《通過》《経過》《消滅》の順に「過ぐ」の用例数が多い一方、動詞に後接する場合は《消滅》《通過》《経過》の順に用例数が多く、その傾向が異なっていることが見て取れる。このことから「過ぐ」が他の動詞に後接する際には単独用法・前接用法とは異なる使用上の偏りが発生していると言える。また意味の面では単独用法と接続用法とに本質的な違いは見出せなかった。

次に『万葉集』において単独で使用される「過ぐ」の意味拡張について考察する。青木・橋本（二〇〇一）、多田（二〇一四）から「過ぐ」における意味用法の形成に特定の基準点が不可欠であったことが窺える。用例を分析すると《通過》の意味で使用された「過ぐ」は三五例中三三例が具体的な場所を基準点として言語化している。1の例は基準点を格助詞ヲで示したものの、2の例は無助詞で示したものである。

また3の例は夫が自分のいるところを船で素通りしたことを咎める内容であり、自分のいるところを基準点とするが、それが言語化されていないものである。なお基準点と「過ぐ」の間に他の語句が挟まれる場合もある。

- 1 大和道の吉備の児島を過ぎて行かば筑紫の児島思ほえむかも
卷六 九六七
- 2 百隈の道は来にしをまた更に八十島過ぎて別れか行かむ
卷二〇 四三四九
- 3 我が恋を夫は知れるを行く舟の過ぎて来べしや言も告げなむ
卷一〇 一九九八

《通過》が主体の具体的な移動を伴う意味用法であるのに対し、《経過》は時間の推移という抽象的な変化を表す。《経過》の意味で使用された「過ぐ」は全30例中23例が具体的な期間や「時」「春」「秋」「冬」など漠然とした時期・期間を基準点とし、それが言語化されている。4は七日という具体的な期間を基準点とした例、5は「春」という季節を基準点とした例である。

- 4 近くあらば今二日だみ遠くあらば七日のをちは過ぎめやも来なむ我が背子ねもころにな恋ひそ
卷一七 四〇一一

ていたことが推測される。このことから『万葉集』の「過ぐ」における《経過》の意味用法は《通過》の意味用法から拡張した蓋然性が高いと考える。

「七日」という期間が基準点となる4の例を見ると「早ければ二日」「遅ければ七日」ではなく「近くあらば今二日」「遠くあらば七日」と距離の概念と時間の概念とを組み合わせて捉えていること、「七日のをちは過ぎめやも」の「をち」について卷一五第三七二六番歌に「一般に空間的に隔たった場所をさす。ここは時間的に用いて、以降、以後、意味する用法」との注釈があること、から具体的な移動と時間の推移とが当時の認識において不可分に関わっていたことが窺える。他に67の例のように主として花や植物の最も良い時期を基準点として使用されたものもある。6の例は嫁菜の古名「うはぎ」の食べ時が、7の例では秋萩の最も美しく咲く時期が、基準点となる。これらの「過ぐ」を意味用法を《経過》と解したが、日常具体的に把握している花や植物の変化から時間の推移を把握していると考えられる。

- 6 妻もあらば摘みて食べまし沙弥の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや
卷二 二二二一
- 7 秋萩は盛り過ぐるをいたづらにかざしに挿さず帰りなむとや
卷八 一五五九

- 5 春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山
卷一 二八

古橋（二〇〇四）（二七二～二七七頁）は以下の歌が冬過ぎて春来るらし朝日さす春日の山に霞たなびく
卷一〇 一八四四

「春来るらし」と推量の形になっているのは、平城京では春を感じられずにいて、春日山に立つ霞によって春が来たことを知ることができたからだとする。そこから奈良時代の人々は季節の到来を時間の変化ではなく空間の移動と捉えていたようであること、当時においては春は山の彼方から山に来、そして里に来ると認識していたことを推測している。

さらに古事記の八千矛神（大国主神）の歌謡に「青山に 日が隠らば ぬばたまの 夜は出でなむ」とあり、「夜が出る」と表現していること、さらに、しだいに朝が近づいてくるさまを、「青山に 鶴は鳴きぬさ野つ鳥 雉はとよむ 庭つ鳥 鶏は鳴く」と鳥の種類によって表現し、山から野へ、野から庭へと朝はやってくるという捉え方の存在を指摘し、当時は一日の時間の変化も場所の移動として感じられていたとした。またこのような捉え方の背後に多神教的発想があることも指摘している。

古橋の指摘からは当時時間の変化が視覚・聴覚を介し、具体的に捉えられた自然の変化を通して捉えられ

以上から当時時間の推移は視覚・聴覚を介し、具体的に捉えられた自身や自然の変化と不可分に捉えられており、『万葉集』の「過ぐ」における《経過》の意味用法は《通過》の意味用法から拡張したと考えられる。《消滅》の意味で使用された「過ぐ」の例として以下の89を示す。

- 8 霜雪もいまだ過ぎねば思はぬに春日の里に梅の花見つ
卷八 一四三四
- 9 卯の花の過ぎば惜しみかほととぎす雨間も置かずこゆ鳴き渡る
卷八 一四九一

8の例では「霜雪」が消えて無くなることを、9の例では「卯の花」が散って無くなることを「過ぐ」と表現している。これらの例で「過ぐ」が指すことは有から無の境界線を基準点とし、時間の推移とともに生じた対象の状態変化であると考えられる。その意味で「過ぐ」における《消滅》の意味は67の例に示した《経過》の意味の延長線上に位置していると考えられる。

また《消滅》の意味で使用された「過ぐ」には10のように「嘆き」が対象となる例も存在する。類例に相手に対する「思ひ」や「恋ひ」が無くなることを表す例も存在する。自らの心に生じた感情も時を経ていつしか消滅することを当時の人々は体感的に知っており、それを「過ぐ」の持つイメージに重ねて表現していた

と考えられる。

10 鶉なすい這ひもとほり侍へど侍ひ得ねば春鳥のさまよひぬれば嘆きもいまだ過ぎぬに思ひもいまだ尽きねば
卷二 一九九

なお《消滅》の意味で使用された例で最も多いのは人が亡くなることを表す例であり、全24例中14例を占める。そのような例では11の例のように9例が「過ぎにし+人物」という形をとっており、定型化していたことが窺える。他に12のように「命」という対象が言語化された例も見られる。人の死を表す用法では枕詞「もみじ葉の」「行く川の」「露霜の」が「過ぐ」を導くことが多い。このような枕詞の使用からも《消滅》の用法が自然現象に見られる「散る」「行く」「消える」などの具体的変化と関連付けて捉えられていたことが窺える。

11 ま草刈る荒野にはあれどもみち葉の過ぎにし君の形見とそ来し
卷一 四七
12 国にあらば父取り見まし家にあらば母取り見まし世の中はかくのみならず犬じもの道に伏してや命過ぎなむ
卷五 八八六

以上見てきたように『万葉集』の「過ぐ」における《通

ることができないことを詠んでいる。

13 船泊ててかし振り立てて廬りせむ名子江の浜辺過ぎかてぬかも
卷七 一九〇
14 もみち葉の過ぎかてぬ児を人妻と見つつやあらむ恋しきものを
卷一〇 二二九七

「過ぎ行く」は用例が九例確認でき、そのうち《通過》の意味で使用されたのは五例、《経過》の意味で使用されたのは四例である。「行く」は「過ぐ」同様空間上の移動や時間軸上の推移を表す用法があり、表す内容が重なることから「過ぐ」も「行く」の表す意味内容と連動し《通過》《経過》両方の意味で使用されたと考える。以下の15は《通過》の意味で使用された用例、16は《経過》の意味で使用された用例である。両方とも単独用法における「過ぐ」と類似した内容が詠まれている。用例を見る限り「過ぐ」の意味用法は単独で使用される1、2、7に示した用例と違いが見られない。

15 大船を漕ぎ我が行けば沖つ波高く立ち来ぬ外のみに見つつ過ぎ行き玉の浦に船を留めて浜辺より浦磯を見つつ
卷一五 三六二七

16 妻恋に鹿鳴く山辺の秋萩は露霜寒み盛り過ぎ行く
卷八 一六〇〇

《過》から《経過》への意味拡張は時間の推移を空間における変化とともに把握するという当時のあり方に起因すると考えられる。また自然物の変化が最終的に行き着く先は消滅である。《消滅》の意味用法は自然物の状態変化の最終点を基準点とすることで《通過》《経過》から拡張したと考える。

三 『万葉集』における「過ぐ」の連接用法

前節に続き本節では他の動詞に連接する「過ぐ」の意味用法について明らかにしていく。『万葉集』において「過ぐ」が他の動詞に前接して形成される動詞表現は「過ぎかつ」「過ぎ行く」のみである。「過ぎかつ」は用例が五例確認でき、「過ぐ」が《通過》の意味で使用されたのは三例、《消滅》の意味で使用されたのは二例である。「かつ」は他の動詞に後接し、可能の意味を表す。しかし打消の意を含む助動詞とともに用いられることが多く、全体の内容は不可能であることを表す。「かつ」がそのような文法的な意味内容を表すため前接する「過ぐ」の意味用法は単独で使用される場合と変わらない。以下に用例を示す。13は《通過》の意味で使用された用例で船を停泊させよう、名子江の浜辺はそのまま通ることとはできないと詠んでいる。14は《消滅》の意味で使用された用例で「過ぐ」は相手に対する気持ちが無くなることを表し、相手を忘れ

一方「過ぐ」が他の動詞に後接して使用される場合七種の動詞が前接している。表二に用例と意味用法ごとの用例数を示した。概ね「過ぐ」の意味用法ごとに前接動詞が分れ、「行き過ぐ」「思ひ過ぐ」「散り過ぐ」といった特定の表現の用例数が多いことが注目される。また《経過》の意味での使用例が少ないことも指摘できる。

表二 動詞に後接する「過ぐ」の用例数(上代)

	通過	経過	消滅
思ひ過ぐ			6
漕ぎ過ぐ	1		
越え過ぐ	1		
咲き散り過ぐ			1
頼み過ぐ		1	
散り過ぎゆく			1
散り過ぐ			17
鳴き過ぎ渡る	1		
行き過ぎかつ	2		
行き過ぎかぬ	3		
行き過ぐ	4	1	1

具体的な意味用法を見るため使用例が多い「行き過ぐ」「思ひ過ぐ」「散り過ぐ」の用例を以下に示す。

17 印南野は行き過ぎぬらし天伝ふ日笠の浦に波立てり見ゆ
卷七 一一七八

18 このころは千年や行きも過ぎぬると我や然思ふ見ま
く欲りかも 卷四 六八六

19 白たへの手本を別れにきびにし家ゆも出でてみどり
子の泣くをも置きて朝霧の凡になりつつ山背の相楽
山の山の際に行き過ぎぬれば 卷三 四八一

20 明日香川川淀去らず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあら
なくに 卷三 三二五

21 我がやどの花橘は散り過ぎて玉に貫くべく実になり
にけり 卷八 一四八九

17 は《通過》の意味で使用された「行き過ぐ」の用
例である。旅をする途中印南野を通過したことを詠ん
でいる。《通過》の意味で使用された「行き過ぐ」の
用例はその殆どが17のように通り過ぎる地点を示した
ものである。18は《経過》の意味で使用された「行き
過ぐ」の用例である。長い間逢えずにいる相手に慕る
思いを問いかける形で詠んでいる。また19は《消滅》
の意味で使用された「行き過ぐ」の用例である。妻の
死んだことを山間に見えなくなったと表現しているの
である。このように「行き過ぐ」の意味用法が《通過》
《経過》《消滅》に渡っているのは「過ぎ行く」同様「行
く」に空間上の移動、時間軸上の推移を表す用法があ
り、「過ぐ」と表す内容が重なるためであると考ええる。

20 は《消滅》の意味で使用された「思ひ過ぐ」の用
例である。天武・持統両天皇の治められた古い飛鳥の

成していたと考えられる。この点については次節で『万
葉集』に見られる類歌との関わりにおいて論じる。

次に用例が一つしか見られない「漕ぎ過ぐ」「越え
過ぐ」「鳴き過ぎ渡る」「頼み過ぐ」について検討する。

22 23 24 は「過ぐ」が《通過》の意味で用いられた「漕
ぎ過ぐ」「越え過ぐ」「鳴き過ぎ渡る」の用例である。
これらの用例では「漕ぐ」「越ゆ」「鳴く」「渡る」「過
ぐ」それぞれが単独で使用される際と変わらぬ意味内
容を表し、独立した事象を表していると思われる。

22 高島の阿渡の湊を漕ぎ過ぎて塩津菅浦今か漕ぐらむ

卷九 一七三四

23 いや遠に国を来離れいや高に山を越え過ぎ葦が散る

卷二〇 四三九八

24 我が門ゆ鳴き過ぎ渡るほととぎすいやなつかしく聞
けど飽き足らず

卷一九 四一七六

また22に対する25、23に対する26、24に対する27の
ように「漕ぐ」「越ゆ」「鳴く」と「過ぐ」が直接連
接せず、同一歌中で使用された用例も確認できる。

25 荒磯辺につきて漕がさね杏人の涙を過ぐれば恋しく
ありなり 卷九 一六八九

26 上るとたらちしや母が手離れ常知らぬ国の奥かを百
重山越えて過ぎ行きいつしかも都を見むと思ひつつ

都を偲ぶ第三二四番歌の反歌として詠まれた。内容の
中心は四・五句にあり、古い飛鳥の都に対する思慕の
念が消えることはないと言っている。21は同じく《消
滅》の意味で使用された「散り過ぐ」の用例である。
家の庭の橘の花が散ってなくなってしまったことを表
している。

以上用例を挙げて「行き過ぐ」「思ひ過ぐ」「散り過
ぐ」の意味内容を見た。これらにおける「過ぐ」は単
独で使用される際の意味用法とそれほど変わりはなく、
前接動詞と「過ぐ」の表す意味内容を一連の出来事と
して連続的に表したものと見ることが出来る。また単
独用法では文脈内に含め、言語化しなかつた付随的か
つ背景的な情報を前接動詞として言語化したものと見
ることもできる。

「行き過ぎかつ」「行き過ぎかぬ」は「かつ」「かぬ」
が動詞に後接し、不可能であることを表すため表す内
容の中心は「行き過ぐ」にある。また「咲き散り過ぐ」「散
り過ぎ行く」も「散り過ぐ」を含み、内容の中心は「散
り過ぐ」にあると考えられる。このように考えると『万
葉集』において動詞に「過ぐ」が後接し、形成された
表現の九割は「行き過ぐ」「思ひ過ぐ」「散り過ぐ」と
それらを含むものであると言える。

これらのことから『万葉集』における「過ぐ」が他
の動詞に後接する場合「行く」「散る」「思ふ」という
特定の動詞と集中的に結び付き、類型化した表現を形

語らひ居れど己が身し

卷五 八八六

27 ほととぎす鳴きて過ぎにし岡辺から秋風吹きぬよし
もあらなくに 卷一七 三九四六

つまり「漕ぐ」「越ゆ」「鳴く」と「過ぐ」は同一歌
中でもともに使われ得る語同士であったと言える。「漕
ぎ過ぐ」「越え過ぐ」「鳴き過ぎ渡る」は用例が一つし
か確認できないため現代日本語における複合動詞のよ
うな緊密に結び付いた、社会的に定着した表現ではな
く、動詞間に他の要素を介入させず直接連接させたた
めに臨時的に生じた可能性がある。なお28に示したよ
うに「鳴く」「渡る」も直接連接することがあり、『万
葉集』において二五例使用が確認できる。「鳴き渡る」
は使用例が多いため「鳴き過ぎ渡る」は「鳴き渡る」
に「過ぐ」の意味内容を加えて形成されたと考えたほ
うが良いように思われる。

28 ほととぎす鳴き渡りぬと告ぐれども我聞き継がず花
は過ぎつつ 卷一九 四一九四

最後に《経過》の意味で使用された「頼み過ぐ」に
ついて検討する。29に用例を示したが、この例は結婚
に際して相手の母親の言葉があるのだからそれを頼り
にしたまま時が経過するということがあるのかという
反語的内容で男の立場から詠まれた歌である。動詞に

《経過》の意味で使用された「過ぐ」が後接すること
は「行き過ぐ」を除き他に類例がない。

29 たらちねの母の命の言にあらば年の緒長く頼み過ぎ
むや 卷九 一七七四

30 神奈備の神依り板にする杉の思ひも過ぎず恋の繁きに
むや 卷九 一七七三

31 泊瀬川夕渡り来て我妹子が家の金門に近付きにけり
卷九 一七七五

伊藤博『萬葉集注釈』によれば29の例は30に示した
第一七七三番歌、31に示した第一七七五番歌と三首一
連で同席での宴歌と認められ、恋を主題にしての遊び
であるとされる。29に示した歌は第一七七三番歌の返
歌の形を取るもので結句の「頼め過ぎむや」は前歌の
第四句「思ひも過ぎず」の意を転換しながら承けてい
るとされる。用例を収集した『新編日本古典文学全集
萬葉集』と『萬葉集注釈』とでは29の例を男の立場か
らの歌と解するか、女の立場からの歌と解するか、「頼
み過ぐ」か、「頼め過ぐ」か、という相違がある。し
かしいずれにせよ第一七七三番歌の「思ひも過ぎず」
を承けて「頼み過ぐ」が作られた可能性は高いと考え
られ、他に類例を見ないのも上記の作歌の背景に因る
ものであろうと考える。

する。

日本語は長きにわたる中国大陸・朝鮮半島との政治
的・文化的交流の中で漢字・漢語・漢文を受容し、文
字言語を獲得した。沖森の指摘するようにその過程で
動詞を連接する表現を受容した蓋然性は高く、藤井
(二〇一八)をはじめ藤井の一連の論考で具体的に解
明されている。また土居の指摘からは和語体系の側
にも複数の動詞を連接する表現を受容する利点があっ
たということが推測される。今日の複合動詞は西欧の
言語には見られず、日本語・中国語・韓国語という東
アジアの言語によく見られるとされるが、このことも
長きにわたる東アジアにおける文化的交流と無関係で
はない。

前述の通り上代語ではその動詞間の結合は緩やかで
あったと見られている。しかし社会の中で共同で使用
されている以上その場限りで生成され、消えていく類
のものだけでなく、固定的に使用され、人口に膾炙し
たものもあつたであろうと考える。それは用例数や表
す内容の固定化等からも具体的に知ることが出来るで
あるが、そのようなものが軸となり、新たな同種の
表現の生成が認められるならばそれは表現相互の連関
が存在していると言える。そしてそれはその連関を基
に一つのカテゴリーを形成していると考えられ、今日
の複合動詞へとつながる直接の祖と見なし得るのでは
ないだろうか。

四 『万葉集』における類歌と複合動詞

前節で『万葉集』における「過ぐ」が他の動詞に連
接する場合「過ぎ行く」「行き過ぐ」「思ひ過ぐ」「散
り過ぐ」に用例が集中し、これらが万葉歌において類
型的な意味内容を表す表現であったと述べた。『万葉
集』には類歌と呼ばれるものが数多く存在する。最後
に類歌と複合動詞形成との関わりについて論じたい。
なお「過ぎ行く」は藤井(二〇一八)に「漢詩から文
学的な表現として意識的に取り入れられたもの」との
指摘があるため除く。

そもそも複合動詞がどのようにして日本語に生じた
のか。このことについて沖森(一九九〇)は「上代変
体漢文に見える漢語動詞の熟語と全く無関係である
とは思われない」「奈良・平安時代の漢文体が四六駢儷
文の四字句・六字句からなる対句を多用する文体を基
調としていることは、日本語の語調、複合語の構成に
影響を及ぼした蓋然性を想定させるのである」と指摘
している。

また土居(一九五七)は『古事記』の複合動詞に関
して「阿禮が用いたと思われる複合動詞はすべて連続
した身体的動作を表わすものであって、このように動
詞を連ねると動作が眼前で行われつつあるかのように、
所作事劇を見ているかのように感ぜしめる。動詞が三
重四重になると動作がいよいよ具象的になる」と指摘

鈴木(一九九〇)のはしがきに『万葉集』における
類歌に関する記述がある。

たとえば、『万葉集』の歌で考えてみよう。

明日香川川淀去らず立つ霧の思ひ過ぐべき
恋にあらなくに (卷3・三二五 山部赤人)

石上布留の山なる杉群の思ひ過ぐべき君に
あらなくに (卷3・四二二 丹生王)

朝に日に色づく山の白雲の思ひ過ぐべき君
にあらなくに (卷4・六六八 厚見王)

万代に携り居て相見とも思ひ過ぐべき恋に
あらなくに (卷10・二〇二四 人麻呂歌集)

右の四首はすべて、下の句が「思ひ過ぐべき恋
(君)にあらなくに」の語句で共通している。こ
のように相互に語句の類同しあう歌を、通常、類
歌と呼んでいる。『万葉集』にはとりわけ、この
ような類歌の現象が顕著である。また、二句以上
の類同関係にある類歌ほどには積極的でなくとも

「……ふりさけ見つつ……」「……そがいに見つつ
……」「……せむすべ知らに……」「……恋ひわた
るかも」など一句程度の類同歌句がおびただしい。
これは歌人同士の単なる模倣などによるのではな
く、いわば歌にとっての一種の決まり文句として、
おのずと選ばとられている歌句とみるべきであら
う。

また鈴木(一九九〇)(一一頁)によれば「言葉の

類同する類歌性が、個の表現を導くための表現形式たりにえていた。「言葉としての集団をかかえこむことによつて、かえつてそこに個の表現を实らせる契機が生ずるようになる。そして、この、集団から個へと転換せしめる力が、歌の構成員として作用することになる」とされる。

そこで試みに詠んだ人物や場が異なる『万葉集』の歌から鈴木木の挙げた「思ひ過ぐ」を除き、「行き過ぐ」「散り過ぐ」を含む歌に類同歌句が認められるか調べてみると類同する表現が多く含まれる以下の歌が見つかる。

32 妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨も降らぬかそをよしにせむ 卷一 二六八五

33 妹が門行き過ぎかねて草結ぶ風吹き解くなまたかへり見む 卷十二 三〇五六

34 梅の花今咲けるごと散り過ぎず我が家の園にありこせぬかも 卷五 八一六

35 我妹子に棟の花は散り過ぎず今咲けるごとありこせぬかも 卷一〇 一九七三

36 我がやどの花橘は散り過ぎて玉に貫くべく実になりにけり 卷八 一四八九

37 我がやどに咲きし秋萩散り過ぎて実になるまでに君に逢はぬかも 卷一〇 二二八六

参考文献

青木生子・橋本達雄監修(二〇〇一)『万葉ことば事典』

大和書房

青木博史(二〇一三)「複合動詞の歴史的变化」影山太郎編『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて―』ひつじ書房

沖森卓也(一九九〇)「古典語の複合動詞」山口明穂編『別冊国文学三八 古典文法必携』學燈社

金田一春彦(一九五三)「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂(『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館(二〇〇一)所収)

齋藤希史(二〇一四)『漢字世界の地平』新潮社

佐佐木隆(二〇一八)「上代日本語の動詞の用法―動詞連接の意味的な分属と反義語の連接―」『学習院大学文学部研究年報』六五

鈴木日出男(一九九〇)『古代和歌史論』東京大学出版会

鈴木日出男(一九九九)『古代和歌の世界』ちくま書房
拙論(二〇一五)「古代日本語複合動詞における語彙性の検討」齋藤倫明・石井正彦編『日本語語彙へのアプローチ―形態・統語・計量・歴史・対照―』おうふう

拙論(二〇一七)「日本語における複合動詞の起源について」『島根大学教育学部紀要』五一

上記から万葉歌における語句の類同しあう歌に複数の動詞を連接する表現が含まれていることが具体的に確認できる。鈴木木の示す類歌の捉え方に基づけば類歌や類同歌句を構成するものは当時の歌を作る人々にとつてそのまとまりが一体的に認識され、新たな歌を生み出す支えと成り得ていた。万葉集に収められた和歌以外にもそれらをもとに多くの歌が作られたであろうから類歌や類同歌句を構成するものは一つのカテゴリを形成していたと考える。そのため類歌や類同歌句を構成する複数の動詞を連接する表現もやはりそのカテゴリの中に組み込まれていたと考えることが出来るのではないだろうか。

沖森の指摘する漢語・漢文体との関わりに基づいて形成された複数の動詞を連接する表現も漢語・漢文体との関係性において一つのカテゴリとしてまとめ上げられていた可能性があり、有力な複合動詞の起源と考えられる。しかし複合動詞の起源および展開の道筋は幾筋もあったと考えることができ、本論で検討した『万葉集』における類歌・類同歌句の存在も、複合動詞の起源および展開の解明につながる道筋の一つであると考えられる。『万葉集』における複数の動詞を連ねた表現は用例数に差がある。用例数の多寡や意味内容の固定化等を考慮しつつ、類歌や類同歌句を構成するかという視点から上代における動詞間のまとまりを検討していくことを今後の課題としたい。

多田一臣編(二〇一四)『万葉語誌』筑摩書房

土居光知(一九五七)「古事記に於ける詩的形象」『古事記大成二文學篇』平凡社

藤井俊博(二〇一八)「『万葉集』における連文の翻読語―「春さりくれば」春されば」の解釈におよぶ―」『人文学』二〇二一

古橋信孝(二〇〇四)『誤読された万葉集』新潮社

(島根大学学術研究院教育学系教授)